

コハクチョウに関する日ソ共同研究

— A. Ya. コンドラチェフ博士の提案 —

藤巻裕蔵

A proposal of Japan-Soviet collaborative research
on *Cygnus columbianus* by Dr. A. Ya. Kondratiev

Y. Fujimaki

1983年9月に日本野鳥の会の招きで、ソ連から3名の鳥学者が来日した。そのうちの一人がA. Ya. コンドラチェフ博士のである。彼はソ連科学アカデミー・極東学術センター・北方生物諸問題研究所に所属し、チュコト半島をはじめとし、ソ連極東北部の鳥類を研究している。なかでもコハクチョウに強い関心をもっており、この度、コハクチョウについて日ソ共同の研究を行うことを提案した。

ハクチョウの保護やそのための観察を行っている私たちにとって、これらの鳥の繁殖地での生活がどのようなものについて大変興味があることである。ハクチョウにかぎらず、渡り鳥の保護とそのための研究には、繁殖地と越冬地の両方での研究が必要であり、私もコンドラチェフ博士のこの提案には賛成である。この共同研究については1984年総会で提起され、会員の皆さんの基本的な賛同は得られているが、この企画をさらに進めるために、もうすこし詳しく紹介したいとおもう。

コンドラチェフ博士の提案は次のとおりである：

コハクチョウの繁殖地での生態については多くの資料があるので、これについてはソ連の研究者がまとめ、越冬地での生態については日本側でまとめる。まとめた結果については、論文のシリーズとして発表する（繁殖期の生態についてはすでに論文が出ており、そのうち1編の訳をこの号に掲載した）。そして、できればそれらの全体をまとめて1冊の本にしたい。このような本が出版されれば非常に有益であり、ソ連ではこのような本の出版は可能である（ただし、ソ連で出版した場合にはロシア語となる）。

このような提案に対して、日本側ではどのような研究成果が得られるかについて、北海道の会員の有志が1986年1月に札幌に集まり、相談の上一つの試案をつくってみた。それは、これから新たに調査をするという内容のものではなく、これまでに行ってきた観察の継続である：

- 1) 越冬地と越冬数。
- 2) 給餌場所、給餌期間、餌の種類など。
- 3) 越冬地で死亡数（できれば死亡原因：死体を専門家に送り調査依頼）。
- 4) 渡来期と渡去前の成鳥：幼鳥比。
- 5) 保護対策の紹介。

以上で。

これらの研究成果を1冊の本にまとめるかどうかについては、将来の問題で、とりあえずできる事から、資料を蓄積し、それをまとめてシリーズとして発表してはどうかと思う。

会員の皆の協力を期待します。